

統一思想から見たハイデッガーの Dasein

- 「本性論」に現われたハイデッガーの人間観批判に対する熟考を中心として-

チョ・ヒョング¹

『今日のように人間に対して多く、
そして多様に知らされた事はなかった。
また今日のように人間に対する知識が力強く、
そして魅力的に提示された時もなかった。
しかし、今日のように人間に対して無知な時もなかったし、
今日のように人間が問題になったこともなかった。』
-M. Heidegger

『人間は本来神様に似たものとして創造された。
ところが、人間始祖の墮落によって神様とは、
無関係な存在になってしまった。
しかし、人間が神様のみ言に従って暮らしながら、
神様からの愛を受ければ、
本来の姿を取り戻すことができるのである。』
- 《統一思想要綱》

1、はじめに

この文で私は、ハイデッガーの哲学《存在と時間》に現われた人間理解が、彼の現象学的方法に即した人間現象の解説を明らかにする同時に、統一思想の観点から《存在と時間》からの核心概念、すなわち人間の死の意識、不安(Angst)、そして良心(Gewissen) 概念に対して比較して見る。このような比較考察作業は、〈ハイデッガーの人間観理解〉を解説できることは勿論、本性論の心情的人間学への変形の一端に寄与できると思われる。このような問題意識を土台に、まず、人間に関する多様な考察方法を見て、現象学的方法に即したハイデッガーの人間(Dasein)理解を紹介した後、統一思想の立場から、ハイデッガーの人間観を「再び」考えて見ることにする。このような研究作業は、『統一思想要綱』(本性論)に現われたハイデッガーの哲学批判の観点と意義、そしてその限界を明らかにすることに寄与できるであろう。

2、人間に関する考察方法

¹ 鮮文大学 文化コンテンツ学(sein7292@hanmail.net)

人間に関する考察の方法には、大きく四種類が考えられる。第一に、前提に即した理解、第二に、現象学的方法、第三に、解釈学的方法、そして最後に構造主義的方法である。

まず、前提に即した理解方法は、その間西洋哲学で人間を見て来た方式を言う。西洋哲学では人間といえば「理性的動物(animal rationale)」と「神様の形状(Imago Dei)」という理解が前提とされてきた。このような事態に対してハイデggerは、人間という単語の中には、取り扱うことのできない先入観と偏見が前提とされて受け継がれて来たと見る。この中の一つは生物学的な前提だが、それはすなわち人間は「理性的動物」という前提である。古代ギリシャの言葉で「ゾオン ログン エコン(zoon logon echon)」と表現されたが、中世ラテン語に翻訳される過程で animal rational と変形されてきた人間理解である。本来「ゾオン ログン エコン(zoon logon echon)」の意味は、「言語の能力がある生命体」である。しかし、ギリシャの生活世界がラテン語の生活世界へと越えて来る中で、言葉の意味が変わってしまったのである。このように変わった意味が、以後西洋の2500年の歴史を支配するようになったのである。私たちは今一度「なぜ哲学が生物学で使っている人間に対する正義を何らの哲学的反省もないまま、使い続けるのか?」と、問いがけて見なければならない。言い換えれば、今からでも哲学は「人間とは何か?」という問いを、特定の前提に縛られず、追いかけて続けなければならない。従来人間という単語には、無機物、有機物、植物、動物、そして動物の中に理性を持っている動物というように生物学的な位階秩序が前提とされているが、哲学はそれを何の疑問も持たないまま受け入れたわけである。このような生物学的な位階秩序図式の中で生命に関する論議を一度たりとも試みず、人間をただ「理性的動物」で規定する。更に、人間に重要なことは「理性」だけだと定めることで、その後の西洋哲学史において理性のみを重視するようになったのである。また、他の前提は神学的な前提である。人間は神様の形状を模倣して作られた存在というのである。このように西洋では人間を理性的な動物で、神様の形状によって作られた存在だと規定してしまったのである。そして、理性に神様と何か通じるものがあることを見ることで、精神、魂、主体、意志、人格等々、理性と係わる全てのものを神様と関連付けて把握するようになったのである。この全てのものは、人間が理性的であることを見せている特徴である。このように 2500 年間の間、西洋哲学では特定の前提によって人間を規定して来たのである。

第二に、現象学的方法はフッサール、プレスナー、マックスシェーラーから来る態度として、現象学のモットーである「事態自体へ(Zu den Sachen selbst)」が言っているように、「人間現象」が現われるまま見ようというのである。そのため、人間が持っているそれ自体の客観的な姿を探そうというのである。伝統的な人間に対する規定である、理性的な動物と神様の形状という前提を脱ぎ捨てて、人間現象それ自体を見ようというのである。このような現象学的態度に即して、人間の現事実的な姿を描き出そうとしたことが、まさにハイデggerの《存在と時間》での(人間)現存在分析論である。

第三に、解釈学的方法は、上記で言及した現象学的態度とは対照的に、私たちの人間理解には常に先入観が作用しているので、ある前提を持って出発するしかないことを認める態度である。よって、その「前提」を反省しなければならず、人間の理解、人間の見方というのは、常にある程度の偏見があるため「人間そのもの」を客観的に見るということは、浪漫的な発想という観点である。

最後に構造主義的方法は、上記の解釈学的方法とは違った客観的な態度を示そうという方法である。このような方法の代表者として、レヴィストロスが掲げられるが、彼の〈野生的思考〉などの作品を通じて分かるように、彼は多くの不足している姿を観察したところを土台にして人間だとする時、その人間という種族が持っている客観的な構造を探して、人間現象を構造的で客観的な立場で説明して見ようとする態度である。このような人間に関する構造主義的考察方法には、**空視的**な方式と**通視的**な方式があり、種族発生的な方式と個体発生的な方式がある。種族発生的な方式の代表者は、フロイド(トーテムとタブー)が掲げられ、個体発生的な方式の代表者では、コールバーグ(L. Kohlberg、道徳性発達理論)が掲げられるであろう。

3.ハイデッガーはなぜ人間(Mensch)ではなく、現存在(Dasein)と名付けたのか

1)「現象学的範囲」で見た人間現象：Da-sein(そこに-ある)

前述で言及したように現象学者の態度を立てた前期ハイデッガーは西洋哲学(形而上学) 2500年の歴史を、外でもない「存在を取り囲んだ巨人たちのけんか」で理解し、存在に対して新しく問いがけて見なければならないと力説して、存在の意味を解き明かす手段で人間現存在に注目した。ところがハイデッガーは、現存在分析では(Daseinsanalytik)を断行しながら伝統形而上学での人間概念、すなわち理性を持った動物と人格(人格性)としての人間理解を避け、²人間を現存在(Dasein)で表現している。³まず、最初の概念は、すなわち理性を持った動物概念は、植物、動物、人間、天使、神のような対象系列を通じて、提示される事態の関連に人間が属しているという観点で、二番目の概念は、すなわち人格としての存在は旧約の啓示によって行われたキリスト教的解明でできたのである。前期ハイデッガーは、このような伝統的人間理解に対して次のような立場を表明している。

²『存在論(現事実性の解説学)』を韓国語で訳してみると、キム・ジェ Chol 教授はこのような事態に対して次のように見ている。“現存在という存在論の意味が含まれている用語の選択を通じてハイデッガーは自然主義的-形而上学的-人文主義的に人間本質を把握するすべての規定、すなわち理性的動物、身体-魂-精神的統一、神統の被造物、主体、意識または人格などから距離を置こうとする。しかし注目しなければならないことはハイデッガーがこの規定を決して間違っていると説明したり、責めていないという点だ。問題はこの規定が決定的に存在論的基礎が規定されていないというのだ。すなわちそれらの存在に対するどんな問いも提議されていないということがハイデッガーの指摘だ。そのためハイデッガーはこの規定を現存在に視線を置いた存在論的解明で一つの二次的欠如の文脈で解釈する。この規定の存在様式は結局、現存在の存在に対する問いができるようにする概念把握と解釈、基礎存在論に土台を置く。』M. ハイデッガー、『存在論(現事実性の解説学)』、イ・キサン/キム・ジェ Chol 翻訳、曙光社、2002、p. 66. 訳注 1) (以下『存在論(現事実性の解説学)』にて表記)。

³伝統に対するハイデッガーの批判と「現存在」という概念の意味などを解明する中に、ハイデッガーの人間論の全体的なイメージをよく描き出したところに対しては次を参照。チェ・サンウク、ハイデッガーの人間論、『ハイデッガー哲学の根本問題』、哲学と現実社、1996、pp.150-185。

『この二つの概念の規定には、先立って与えられた事物が取り揃えている項目を固定化することが重視されている。それを通じて、それ以降にもその事物には統一された根拠として、一つの定められた存在方式が叙述されるようになった。すなわち、その事物を無差別的に一つの実在存在として規定するのが容認される。』⁴

このような理由で前期ハイデッガーは、人間に対する伝統的な生物学的、そして、神学的な前提を拒否して、現象学的な視覚で人間現象(生の現事実性)を見ようとする。ここで現象学的態度で人間現象を解読する方法の特徴に対し、前提に即した解読方法と照らし合わせながら、考えて見る事にする。まず、特定の前提に即した人間を図り読むことは、人間(本性)に対する形式的-普遍的な規定を提供することで、私たちが到達しなければならない理想的な目標と方向を力強く提示することはできるであろう。しかし、私たちの毎日の現事実的な、泥沼化した本来性と非本来性がゆらぐ生の現象を見逃すという弱点が生ずる。それで、私たちの具体的な生の姿に的をしぼれず、徐々にイデオロギー化されていく。このように伝統的人間理解と対決して、現象学的態度に即して現事実的に現われるままの人間現象を見出そうとしたハイデッガーは、人間を各々の生の「そこ(Da)」にある者、すなわち「現-存在(Da-sein)」と呼んだのである。この表現には、存在との関連で人間の人間らしさを探そうとする意図も含まれている。

2)現存在の死、不安、そして良心の呼びかけ

存在という意味について問いがけることから人間の人間らしさを探すハイデッガーは、人間を現存在と表現して、その現存在の根本構成として世界-内-存在(In-der-Welt-sein)と提示する。特定の世界内で生きて行く人間は「優先大概」主義の道具(事物)を配慮 (Besorge)し、他人を心慮 (Fürsorge)し、自分自身の存在可能に対して心配(Sorge)しながら生きて行く。このような関係の枠の中で他人と係った生の世界で、私たちは幸と不幸、喜びと悲しみ、歓待と機嫌を伺って自分の生きる道を模索している。このように私たちは日常生活の中で、周囲の意見や事情に自分を合わせて権力を持った者によく見せようと自分を守りながら、自分の主体性を喪失する。これがまさに「人々 (das Man)」の生の姿である。これを統一思想の立場で言うならば、「優先大概」の人間は心情と真の愛の生の論理どおりに生きることができない。言い換えれば、生心の欲求が根本的な欲求に終わることなく、お金や権力を追い求める肉心の欲求が先になって生活を追い求めるうちに、競争と所有に貪溺する疲れた人生を送りながら、結局自己喪失の虚無感に陥って生きるのである。このように生心と肉心の関係が転倒された生活の中に生の虚無感を感じるようになった人間は、温和で安穏な論理と法則に従った生とは言えない「自分自身」のために生きる生の論理と法則を形成しようと努力するのである。ところで、そのような時私たちはいかなる気分を感じるようになるのか?普通

⁴ 『存在論(現事実性の解説学)』、pp.49-50。

の人々が感じることはない心配と平安ではない不快さを感じるであろう。ところで、ハイデッガーは私たちが世の常から一步退いて、自分自身の最も固有した存在可能を気遣い、窮極的な関心である死へ向かう演習をする時、その時の根本的な気分(Grundstimmung)を不安(die Angst)⁵と表現する。私たちは「人々」がするようにすれば心細くない。なぜなら「人々」と全く同じであれば、その中でむしろ安定感と平樂を感じるからである。しかし「人々」がするのと全く同じように暮す人は、「自分自身」の決断による生を生きることができない人である。だから本来的な実存を生きることができない。ハイデッガーは、私たちが本来の姿に真向から対した時が、死に対する不安を感じる時だと言う。人間は死に向かった存在である。現存在はいつか死ぬ。これこそ最も確かな真理である。近代的世界観を開拓したデカルトが『我思う。ゆえに我あり』ということが最も確かな真理だとし、近代精神の完成者だったヘーゲルは『全体が真理だ』とした。しかし現代実存哲学を開拓したキェルケゴールは初めて人間を実存で見ながら死を本格的に哲学的主題で掲げた。その結果『主体性が真理だ』ということを強調するようになった。ここに刺激を受けたハイデッガーは更に、死を人間にとって本来的な実存へ向かうようにする根本現象として、死の存在論的な意味を開拓して行ったのである。彼は『存在と時間』第 46 節から第 53 節にわたって死の存在論的な意味を現存在の日常性と比較して行きながら集中的に論究している。

私たちは忙しい日常生活の中でも、時々、これまでに私が構成しておいた意味世界が完全に崩れ落ちるように感じる。そして日常の中で周囲の「人々」によって構成された環境の中で面白い刺激的な生活を楽しんでいながらも、一人である時、深い「形而上学的虚無感」のような気分を体験したりする。私たちが前もって死へと向かう本来的な実存で生きようとする時、むしろ『人々は死の前での不安に対応できる勇気が起きないようにする。』⁶ 私たちは新聞の訃告(訃告)欄や周り人々の昇華の消息を聞く時にも心の中では、「自分はまだ死なない。死は私とはまだ関係がない」と慰勞しながら、死を自分の死と考えられない。騒々しい病院の霊安室に行ってもその家族と無念な心を交わしたりするが、自分の死ではないと思い、人間関係上行って来たというだけの出来事として簡

⁵我々はこのハイデッガーの不安概念を単純に生物学的、心理学的に受け入れてはいけない。不安は現存在の根本的なところに置かれている。現存在は処されている、理解そして言葉として投げられた世界の中での解き明かしを維持することができるのに、この中で処していることは現存在が備えているある特性が特性や能力ではなく世界を解き明かす一つの機会である。このような位置におかれた現象は、理性的推論や分析によるのではない日常的な気分によって、気分が因習されているところから言うことができる。私たちは私たちの特定の世界の中に置かれていることを、どのように感知するか?動揺されなかった沈着、恐怖、倦怠、絶望、知の軽さなどの気分を通じてではないか。この中で、ハイデッガーは現存在の根本気分、根本に置かれていることを不安だと表現するのだ。死へ向かった存在である現存在が最も個別化されることができ、本来的な実存を回復することができる機会が、すぐ死の前での不安を通じているからである。私たちの窮極的な関心である死、そしてその死の前での不安を通じて私たちは実存的決断をし、良心の呼びかけを聞くことができるようになり、私たちの現実性を生硬に見られる。ハイデッガーで、このような根本気分に対する私たちの生活世界に土台を置いた先駆者的で独創的な先駆けた研究に対しては次を参照。ク・ヨンサン『恐怖と恐れそして不安』、ソウル：清溪、2001。

⁶ M.ハイデッガー、『存在と時間』、イ・キサン翻訳、カチ、1998、p.340。(以下『存在と時間』で表記)。

単に考えてしまう。このような私たちの死に対する日常的な態度に対して、警鐘を鳴らしてハイデッガーは次のように死に対することを強調する。

『すべての現存在はそれぞれ死をその時ごとに自ら自分のこととして受け入れなければならない。死は、それが「ある」限り、本質的にその時ごとに私の死である。そして、死はそこで端的にそれぞれ自分の固有した現存在の存在が問題になっている独特の存在可能性を意味する。死亡で現われるのは死が存在論的に各自性と実存によって構成されるという点である。死亡は事件ではなく実存論的に理解されなければならない現象で、詳しく限定されなければならない卓越な意味での現象である。』⁷

それならこのように死を日常的な事件ではない私の固有した存在可能が問題になっている実存論的現象をどのようにして理解できるのか？雑多な日常生活の中で理解することができるのか？ハイデッガーは死へ向かう時の根本的な気分、すなわち不安から無が現われ、存在者全体が意味を失うという事件が起こると言う。私たちは不安の中で無を経験することができる。ところで無の本質は無化(die Nichtung)である。この時『無化作用(das Nichten)はある自分勝手に起きた出来事ではない。それはむしろ滑り出る存在者全体を拒否し、その存在者全体を-無に向い-今までは隠されていたとても不慣れた形態の中で端的な他者として現われる。』⁸ 私たちは不安という根本気分の中で、私たちの欲望や恣意的な解釈ではない「ありのまま」の事物の事物らしさと他人の個性心理体としての姿を見ることができる可能性へと入門するようになる。ところが一方では、私たちは日常生活の中で不安なく過ごして、他の事物や他人との関係をどうにかこうにかして結びつけながら生きているのではないのか？このような私たちの「優先大概」の日常はどのように言えるのか？

それはちょうど『無が私たちに「優先大概」その根源性にあって偽装されていることを言うのである。それならどのようにしてそれができるのか？それは、私たちが私たちを特定の方式で完全に存在者として失ってしまうことで可能である。私たちが日常的な活動の中でより一層存在者として没頭すればするほど、私たちはより一層存在者自体から抜け出せないようにするはずで、より一層無から遠ざかってしまう。そして私たちはより一層明確に私たちを現存在の**公的な表皮**(öffentliche Oberfläche des Daseins)へ追いこむであろう。』⁹

私たちの日常的な存在様式である雑談(Das Gerede)と好奇心(Die Neugier)そして曖昧さ(Die Zweideutigkeit)は決断性と本来性の次元で見ると実は現存在の**公的な表皮**に関連した生の世界である。よって日常での外見だけで理解打算的な態度では、他の事物や他人とまともな関係を持つこ

⁷ 『存在と時間』, pp. 322-323.

⁸ M. Heidegger, "Was ist Metaphysik", *Wegmarken* GA9, hrsg. Friedrich-Wilhelm von Herrmann, Vittorio Klostermann Frankfurt am Main, 1976. p. 114.; イ・キサン翻訳、『形而上学とは何か』、ソガン社、1994、p. 89。(以下 *WM*、『形而上学とは何か』で表記)。

⁹ *WM*, p. 116; 『形而上学とは何か』, pp. 92-93.

とができず、そんな意味からハイデッガーは『無の根源的な出現なしには自分自身で存在せず、自由もない』¹⁰と云うのである。¹¹生のそこにあるという、すなわち『現-存在とは無の中にとどまっていることを言う。』私たちは各々自分の死へ前もって向かって見る演習の中で無の番人(Platzhalter des Nichts)としての自分自身を見つけるようになる。

このように無の番人としての現存在であることを悟って、自分自身の固有した存在可能を気遣いながら生きて行く現存在は、心配の呼びかけとしての良心の声を無視することができない。私たちが現存在としてこのような心配の呼びかけを聞くということは何を意味するか?『呼びかけを正しく聞くというのは、すなわち自分の最も固有した存在可能で自分を理解すること、言い替えれば固有した本来的な理由を持つように自分を企画透視するということである。理解しながら、自分をこのような可能性への呼びかけに差し置くことは、そのものの中に「呼びかけに対して現存在が自由になる」こと、すなわち「呼びかけに対する準備態勢」を含んでいる。現存在は呼びかけを理解して自分の最も固有した実存の可能性に耳を傾けているのである。彼は自分自身を選択したのである。』¹²現存在は自分自身を選択することで「人々」には閉ざされた自分の最も固有した理由があることを意識しながら、良心を持つのを願う態度で転向することができるようになる。ハイデッガーは良心を持つことを願うという生の姿勢で生きて行く時「人々」の世界に埋没されず、「自分自身」の決断による本来的な自分の生を選択することができるという。¹³従って、このような自分自身の最も固有した存在可能から、自分を理解する良心を持つことを願うのは現存在の解き明かされた一つの卓越な方式である。現存在の解き明かしは、理解外へも置かれている言葉があるのに、良心を持つ願いという事態では不安の中に置かれ、良心の沈黙する言葉を聞くことができる。現存在の良心を持つことを願うのは、不安といふところに置かれ、ここで分類把握する言葉の様態は沈黙しているである。¹⁴良心の言葉は、決して声や単語では現われない。ただ静寂の中で自分の最も固有した存在可能へ呼び止める。このような良心の沈黙の言葉の聞き手は「人々」の安易な理解に根拠した雑談と、真正性のない好奇心の

¹⁰ WM, p. 115; 『形而上学とは何か』、p. 91。

“Ohne ursprüngliche Offenbarkeit des Nichts kein Selbstsein und keine Freiheit.”

¹¹ WM, p. 115; 『形而上学とは何か』、p.89。

“Da-sein heißt : Hineingehaltenheit in das Nichts.”

¹² 『存在と時間』、p. 384。

¹³このようなハイデッガーの良心概念が合意している倫理学的意味と現代の倫理的状況そしてそれによる人間行為の本質などに関して論究したところでは次の文章を参照することができる。ク・ヨンサン、「Kant倫理学から良心の問題-ハイデッガーの良心概念に根拠して」、韓国外大人文学研究所、『人文学研究』(第8集)、2003、pp.101-132; パク・チャング、『ハイデッガーと倫理学』、哲学と現実社、2002。; イ・ユテク、「ハイデッガーの伝統倫理学批判と根源倫理学の理念」、韓国ハイデッガー学会、『ハイデッガー研究』(第13集)、2006年春号、pp.129-155。

¹⁴ハイデッガーの言語思想で沈黙の意味に対しては次を参照。ペ・ハクス、「聞くこと、読むこと、黙ること(ハイデッガーの言語哲学)」、韓国哲学会編、『現代哲学と言語』、哲学と現実社、2002、pp.192-215。

世の中から距離を置くようになる。ハイデッガーはこのような現存在の解き明かされている事態を次のように要約提示する。¹⁵

『良心を持つ願いに置かれている現存在の解き明かしは、不安に置かれる事によって、最も固有した理由があることへ自分自身を企画透視という理解によって、そして沈黙していることへの言葉によって構成されている。このような現存在自身の中でその良心によって証拠となっている卓越した本来的な解き明かしであることを、すなわち沈黙しながらも不安の態勢の中で、最も固有した理由があることへ自分自身を企画透視することを私たちは決断性だと呼ぶ。』¹⁶

4、統一思想(本性論)から見たハイデッガーの Dasein 理解

前述の論議を土台に私たちは《存在と時間》に現われたハイデッガーの人間(Dasein) 理解を次のように整理することができる。

- ・ 人間は世界-内-存在という根本構成を持つ。
- ・ 人間は「優先大概」平均的日常性の中に陥って生きている。
- ・ 人間は道具(事物)に対して配慮し、他人を心慮し、自分自身の存在可能を心配しながら生きて行く存在である。
- ・ 人間は不安という根本的な気分を通じて本来性を回復することができる。
- ・ 人間は死への存在である。
- ・ 人間は良心を持つ願望で決断することができる。

この中に私は《統一思想要綱》で《存在と時間》の重要概念を批判して、ハイデッガー哲学を整理している点に合わせて死への存在、不安、そして良心概念を統一思想の立場で「再び」考えて見ようとする。

1) 「性相と形状の統一体」から見た人間(死に向かう存在)の死意識

去る 20 世紀、最高の哲人として数えられるハイデッガーは人間の時間性(Zeitlichkeit)に注目して時間の中で生きる存在の意味を解説しなければと強調して、結局人間を死に向けた存在で定義している。自分の最も固有した存在可能性に目覚めるようにする事件である死の実存論的意味を浮上させることで、死を哲学の核心主題として再度掲げたハイデッガーは、しかし彼の現象学的態度による限界にも直面している。代表的な批判の中の一つは死を語りながら、「体」に関する談論が抜けているという事実である。私たちが人間の死と死意識を語りながら、どうして身体に関する話を見逃すことができるのか。メルロポンティが「生の存在論」を語り、身体の現象学を展開することもこのような批判的観点に属すると見られる。二番目に、最近、死学で頭角している臨死体験と係わる死後の世界に関する学問的談論も排除されている。この分野に対して哲学では永遠に沈黙されなければならない

¹⁵ 『存在と時間』, pp. 393-395 参照。

¹⁶ 『存在と時間』, pp. 395。

いのか?このようなハイデッガーの死の談論に対する二つの批判的視覚を念頭に置いて、《統一思想要綱》での批判的論議を考えて見る事にしよう。

彼は死も決意された死として受け入れる時、死への不安を超越すると言った。しかし、これで死に対する不安を解決したことにはならない。統一思想から見れば、人間は霊人体と肉身の統一体、すなわち性相と形状の統一体であり、肉身を土台として霊人体が成熟するようになっている。そして人間が地上の肉身生活を通じて、創造目的を完成すれば成熟された霊人体は肉身の死後、霊界で永遠に暮す。人間は「死への存在」ではなくて「永生の存在」である。¹⁷

上の引用文でもわかるように、《統一思想要綱》では「性相と形状の統一体」という人間理解で死と死意識を語っている。人間は心と体が統一を成している心身統一体として、心の現象一つで死に対する意識が可能である。まだ来ない私の死へ向かうという実存論的事件が可能で、その事件の完全な意味を自分の現実的な生として体得する人は、死意識が含んでいる自分の固有した存在可能性、あるいは本来性の世界へ目覚めるという悟りを味わうことができるのである。私たちが日常生活で死に対する不安を感じることは、肉身生活の中で実現させなければならない霊人体の完成に対する心配のためである。それなら霊人体の完成はいかにして可能なのか?それは『必ず真の愛の実践を通じて、体と心が完全一体となった生の土台の上でこそ、完熟した霊人体の実が結ばれる。』¹⁸

現象学的態度ゆえ死以後の世界と神様に対しては結局沈黙を守るしかないこととは、対照的に統一思想では伝統的な「神様の形状」という人間理解に新しい心情解釈学的な作業を加えて、人間を神性的存在、**神状的**存在、そして格位的存在で解いている。この中で、神様の姿に似ている側面、「性相(霊人体)と形状(肉身)の統一体」という側面から、人間の死と死意識を扱っているのである。霊人体と肉身の統一体としての人間は『地上界で肉身を使って現象世界と各種関係を結んで行きながら暮すのと同じように、霊界でも人間は霊人体を持って、霊界の全ての現象と密接な関係を維持しながら、生きなければならない宿命的路程』を持った存在である。¹⁹

心情と真の愛の真理を実践して行きながら、万物と他人に対して心情的関係を結んだ超越した生(Gelassenheit)を通じて、人間は肉身の死を昇華させることができるであろう。

2)「神性的存在」から見たハイデッガーの不安概念

どこから来てどこに行くのかを分からないまま生きて行かなければならない人生の上で、私たちが感じる根本気分はどうであるのか?ハイデッガーはそれを不安だと表現した。その不安の中で、人間は死を考え、良心の声に聞き入ることができるのである。そして、この不安の中で、私たちは無に会

¹⁷ 統一思想研究院『統一思想要綱(改訂版)』成和社、2001、p. 281。(以下『要綱』にて表記)。

¹⁸ 天宙平和連合/世界平和統一家庭連合、『平和訓経』成和社 2007、p. 55。

¹⁹ 『平和訓経』、p. 54。

い、神様の痕跡に気付かされる。このような人間が感じる不安という根本気分に対して統一思想では次のように見ている。

『ハイデッガーは人間が漠然と未来を待つのではなく、真剣に未来に向けて決意する時、不安から救済されると言った。しかし、本来の自分の姿が明白ではないのに、いかにして不安から救済されることができようか。統一思想から見れば、不安の原因は神の愛から離れたことにある。従って、人間は神に帰って神の心情を体恤して心情的存在になる時、初めて不安から解放されて平安と喜びが溢れるようになるのである。』²⁰

ハイデッガーは本来の自分の姿を言及しない。現存在の本来性-非本来性という事態を論議はするが、統一思想と同じ**神状的**存在、神性的存在そして格位的存在という本来の自分の姿を持たなければならないと提示することはできない。ただ、自分自身の決断と良心の声によって実存としての生-各自が自分の存在を遂行するべき-を生きなければならないと強調する。更に、本来自分の姿という客観的な基準は提示されることができないと考える。このような事態に対して統一思想では、特に神性的存在、中でも心情的存在という側面で人間の「見放される(Geworfenheit)」という不安を克服することができると思う。愛しながら喜ぼうとする静寂な衝動である心情、そしてその心情が動機となって創造という事件を起こした神様と永遠の真の愛の関係を実現することに人生の目的があると思うのである。これがまさに、神様と人間の間には平和を成す根本原理であり、この根本原理を体得して、そのまま実践する生を通じて私たちは荒れて孤独な人生の道の上に見放されたという無意味さを振り落とすことができる心情の体恤、真の愛の情緒に濡れて生きることができるであろう。

3)《平和訓経》から見たハイデッガーの良心概念

ハイデッガーは《存在と時間》で根源的な現事実の一つで良心現象を分析している。現存在の存在である心配、そしてその心配の叫びとしての良心(Das Gewissen als Ruf der Sorge)の声に耳を傾けることを通じて、現存在は本来の自分自身を生きることができると主張する。ところで、この良心現象は、現象学的方法に即して見る時、私から来て私に覆って来る現象として沈黙の様態で、しかし大きく鳴らして来る音なき声である。しかし、ハイデッガーはこの良心の由来と願い、そして普遍的基準のような説明はできない。これに対して統一思想では、ハイデッガーの良心概念に対して次のように批判する。

『統一思想から見ると、良心によって生きることだけでは不十分である。人間は本心によって生きなければならない。良心は各自が善だと思うことを志向しているため、人によって良心の基準が違う。従って、良心によって生きる時のそれが本来の自分を志向しているのかどうかを誰も確言することが

²⁰ 『要綱』、p. 281。

できない。神様を基準にする本心によって生きる時、人間は初めて本来の自分に向かって行くようになるのである。』²¹

それなら統一思想では本心と良心の概念差を明確に提示しなければならないであろう。本性論では『生心と肉心が合成一体化したのが人間の心だが、生心が主体、肉心が対象の関係にある時の人間の心の本心である。』²²と説明する。従って、肉心が生心に基づいて、生心が本来の機能をするならば、霊人体と肉身は互いに共鳴する。このような状態が人格を完成した状態で、すなわち本然の人間の姿だと強調する。²³一方、原理講論では『生心と肉心との関係は性相と形状との関係と同じで、それらが神様を中心として授受作用をして合成一体化すれば、霊人体と肉身が合成一体化するという創造目的を志向する一つの作用体を成す。これがまさに人間の心である。』²⁴と説明する。ところで、人間が墮落し、善の絶対的な基準が分からなくなったため、人間は自分が善だと思ふことを志向するようになるが、これを良心と言う。従って歴史上に良心を主張する人々の間でも闘いが起きるようになるのである。

このような良心と本心の差を置く観点を土台にして、統一思想ではハイデッガーの良心概念に善の絶対的な基準提示がなく、従って主観的な心としての良心だと批判する。しかし、ここで私は根本的な問題提議をしようと思う。神様を基準にして、生心と肉心が授受作用をする一つの作用体が本心で、そのまま生心と肉心が授受作用をすれば良心だとすると、神様を基準にするという基準はどのように語られるのか?そして、最近、私たちが訓読している《平和訓経》では本心よりは良心という表現が確実に多いが、それならこれを本心で読まなければならないのか?それとも、また他の意味を付与しなければならないのだろうか?

《平和訓経》では良心を神様の代身として置き、影のない正午定着的な生を生き、²⁵人間が地上界で一生を航海するのに必要な羅針盤として神様がくださった贈り物が、すなわち良心であると力説する。更に、そのような良心は真の父母、真の師匠、真の主人の役目をしていると強調する。²⁶しかし、このような人間の良心に墮落性の垢が付いて、様々な罪悪と疾病の中で、サタン主観圏のこの邪悪な世界で本来の機能を全て発揮することができないのである。このような現実的な状況で、早く解放-釈放を受けたくて泣き叫んでいる良心の声を耳を傾けることを知っている私たちにならないことを、また《平和訓経》は強調している。このような《平和訓経》の観点から見る時、ハイデッガーの良心概念は、神様は介入されなかったが、本来性を回復しようとする墮落した人間の心の作用と見られるであろう。

²¹ 『要綱』、p. 281。

²² 『要綱』、p. 234。

²³ 『要綱』、pp. 234-35 参照。

²⁴ 世界基督教統一神霊協会、「原理講論(36 版標準横書)」成和社、1994、p. 69

²⁵ 『平和訓経』、p. 88。

²⁶ 『平和訓経』、pp. 276-279 参照。

5、《存在と時間》以後のハイデッガーの人間観と統一思想から見た Dasein

私たちは今まで《存在と時間》に現われたハイデッガーの人間(Dasein) 理解を見て、そのような人間現象の解釈が彼の現象学的態度に即していることを確認して見た。そして、統一思想本性論の観点でハイデッガーの死意識と不安、そして良心概念に対して「再び」眺めて見た。これからは、《存在と時間》に現われた人間理解は、前期ハイデッガーの立場で、後期においては、どのように変わるのかと統一思想、すなわち心情真理の光で見たハイデッガーの現存在(Dasein)としての人間理解に対して簡単に言及してまとめようと思う。

まず、《存在と時間》以後、後期に入ってハイデッガーは現象学的態度から離れた、いわゆる **全会** (Kehre)を見せてくれる。**全会**以後、ハイデッガーの哲学は多くの点で他の観点を見せてくれるが、この中で人間に対する理解が特にそうである。《統一思想要綱》にはこの部分が全面的に欠けていて簡略して紹介する事にする。²⁷

- ・ 人間は無自身が無化する不安の中で、全体としての存在者を超越する。
- ・ 人間は言語という居所に居住する。
- ・ 人間は存在の言葉に対する回答として思惟する。
- ・ 人間は「死者」として「地」、「空」、「神的なこと」と共に世界の一部を成す。
- ・ 人間は故郷を喪失している。
- ・ 人間は存在と本然的に互いに共存する。

このように後期ハイデッガーは現存在や実存としての人間ではない存在の観点から人間を例えている。これに対しては、また他の詳細な論究をしなければならないので、言及だけする事にして最後に本性論の立場でハイデッガーの現存在の理解に対して考えて見る事にする。まず、前期ハイデッガーは伝統的に伝え受け継がれて来た人間に対する先入観と偏見から脱して、現象学的方法に即して、人間現象を見ようとした。そのため、そのような現象学的見方によって人間を現存在(そこにある)として名付けた。世界-内-存在という構成を持った現存在は、自分が携わっている世界の中に属しながら、自分なりに理解して、言葉を交わしながら生きて行く。その中で、自分の存在可能性と死へ向かう実存論的決断を通じて、良心の声に聞き入って本来的な自分として生きようと努力する。これが《存在と時間》を通じてハイデッガーが見せてくれた現存在の赤裸裸な姿である。このような現存在としての人間理解に対して、統一思想ではどのように語ることができるか。人間理解の方法的な側面で見ると、本性論の最大の特徴は、「神様の形状」という神学的前提を受け入れながら、ここに心情解釈学的説明を加えたものと言える。言い換えれば、神様と似ているという観点(**原状**の普遍性と個別性)で人間の外見と性稟、そして現実世界での格位性に対して解く、その心情解釈学的な作

²⁷ イ・スジョン、「人間は存在の心理を守る番人だ」 ソ・ガンヒ外 13 人、『人間に対する哲学的省察』文芸、2005、pp. 409-435 参照。

業で本性論の独自の人間理解が際立っているのである。このような本性論の観点で見る時、ハイデッガーの現存在、すなわちそこ(Da)ある(sein)は具体的に肉身を持っている人間ではないか。ところで、どうして人間の体に対して何らの言及をしなくても済むのか。生のそこ(Da)にあるこれとは具体的には男性と女性ではないか。それなら男性と女性の現実世界での違い—身体的差異、性格の違いなど—どのように見なければならぬのか。私たちの生活世界で男性と女性の違いによって起る幾多の問題を考える時、この問題は簡単に見逃すことができないだろう。それで、本性論では夫婦の和愛の問題は、社会問題と世界問題を解決する鍵とまで見ている。²⁸

存在との関連で人間の人間らしさを捜して、存在の意味解明の断礎を持った人間現存在を分析することで哲学の新しい地平を開こうとしたハイデッガーの試み《存在と時間》は未完成で終わった。なぜ、そうだったのか?後期に行って彼は、人間を初めから脱存(Ek-sistenz) または死者(die Sterbliche)で名付ける。更に『ただ神だけが私たち(人間)を救援することができる。』という言葉でシュピゲル雑誌とのインタビューを飾った。これ以上、現象学的技術方式で人間現象を描き出すことができないことを悟ったのだろう。新自由主義と技術と科学、そして資本主義の力で解き明かされた今日、存在真理の番人としての人間の旅程がハイデッガー自身の生のように寂しく見える。それなら心情真理の番人を自任する私たちの生の根本気分はどうなのか。

参考文献

I、統一思想関連著書

鮮文大学/統一思想研究員、『《統一思想要綱》(頭翼思想)』、天安:鮮文大学出版部、2007。

世界基督教統一神霊協会、『原理講論(36版標準横書)』、ソウル:成和社、1994。

世界平和統一家庭連合、『平和訓経』、ソウル:成和社、2005。

II、ハイデッガーの著書(Martin Heidegger, Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M. 全集順)

Sein und Zeit(GA2), hrsg. von Friedrich-Wilhelm von Hermann, 1975。(『存在と時間』、イ・キサン翻訳、カチ、1998)。

『Das Ding (事物)』, Vorträge und Aufsätze (GA7, 講演と論文集), Neske: Pfullingen, 1978。

『Bauen Wohnen Denken (建築居住事由)』, Vorträge und Aufsätze (GA7, 講演と論文集), Neske: Pfullingen, 1978。

『Was ist Metaphysik?』 Wegmarken(GA9)(『形而上学とは何か』, イ・キサン翻訳、ソガン社、1995)。

²⁸ 『要綱』、pp. 236-240 参照。

Ontologie(Hermeneutik des Faktizität,GA63),hrsg.von Käte Bräcker-Oltmanns,Vittorio Klostermann Frankfurt am Main,1988.、『存在論(現事実性の解説学)』、イ・キサン/キム・ジェ Chol 翻訳、ソガン社、2003)。

III、その外の著書

W. D. Blattner,『The Concept of Death in Being and Time』,Heidegger Reexamined 1(ed by H.Dreyfus & M.Wrathall),New York: Routledge,2002。

Carol j.White,『Dasein,Existence,and Death』,Heidegger Reexamined 1 (ed by H.Dreyfus & M.Wrathall),New York: Routledge,2002。

シン・サンフイ、『時間と存在の光.ハイデッガーの時間理解と**生氣**事由』、ソウル: ハンギル社、2000。
、『ハイデッガーと神』、ソウル: 哲学と現実社、2007。

イ・スジョン、「人間は存在の真理を守る番人だ」、ソ・ガンヒ外 13 人、人間に対する哲学的省察、ソウル:文芸、2005。

イ・キサン、『ハイデッガーの存在事件学』、ソウル: ソガン社、2003。

チョ・ヒョング、『ハイデッガーの生の解析学』、ソウル: チェリユン、2009。